



昭和29年に創刊して
62年、『広報とみさと』
は800号を迎えました。

広報 とみさと

10
/ 1

No.800
平成28年
2016.October

おもな
内容

- 富里市の賑わい拠点として活用
末廣農場跡地の紹介…… 3
出店者募集
産業まつり・リサイクルフェア… 4
競走馬のふるさと富里
馬とのふれあいデー…… 4
平成29年度幼稚園・認定こども園
園児募集……… 5
平和学習リーダー派遣事業 ほか
とみさとプラザ………14

発行●富里市 編集●富里市総務部秘書広報課 〒286-0292 千葉県富里市七栄 652 番地 1 TEL●0476 (93) 1111 (代) FAX●0476 (93) 9954 発行日●10月1日(毎月2回発行)
●富里市ホームページアドレス <http://www.city.tomisato.lg.jp/> ●電子メールアドレス info@city.tomisato.lg.jp

連載特集

岩崎久彌と末廣農場

末廣別邸の寄附に至る経緯と

現在までの取り組み、そしてこれから

平成25年12月24日に富里市初の国登録有形文化財に登録された「旧岩崎家末廣別邸」。一般公開が待ち望まれるこの旧岩崎家末廣別邸について、今一度、皆さんの理解を深めていただくために、別邸を建築した岩崎久彌と岩崎家、そして別邸の歴史について広報とみさと10月1日号、11月1日号、12月1日号に連載で紹介します。

岩崎久彌と岩崎家

岩崎久彌(三菱財閥第3代総帥)
(1865~1955)

三菱社長引退後、本格的に農牧事業に携わる。若かりし頃から蓄えた豊富な知識は末廣・小岩井農場の経営にいかんなく発揮された。



岩崎彌之助(三菱財閥第2代総帥)
(1851~1908)

三菱総帥を久彌に譲った後、第4代日本銀行総裁となる。小野義真・井上勝と共に小岩井農場を興したことで知られ、美術収集家としての顔を持つ。



彌太郎の弟

岩崎彌太郎(三菱財閥初代総帥)
(1835~1885)

三菱財閥創業者で初代総帥。土佐藩家老吉田東洋に仕え、才覚を表す。坂本竜馬の海援隊を財政的に支援していたことで有名。



久彌の父

岩崎久彌と三菱社

若き獅子、海を渡る

岩崎久彌は、慶應元年(1865)8月25日、土佐国安芸郡井ノ口村(現高知県安芸市井ノ口)で、三菱の創設者である岩崎彌太郎とその妻喜勢の長男として誕生しました。

久彌は慶應義塾、三菱商業学校に学んだ後、父彌太郎が病没した翌明治19年(1886)に米国ペンシルベニア大学に留学、財政学などを学びます。同年、彌太郎の志を継いだ実弟の彌之助は海運業から撤退という英断を下し、新たに「三菱社」を創設。鉱業や造船など、海上から陸上への事業に転身を果たします。

また、明治26年(1893)

には、商法の施行に際して製糸会社を設立するなど社業を拡充し、鉱業、銀行、造船、商事、地所などの諸事業でも大躍進を果たしました。久彌が社長を務めた期間は、国内で殖産興業、産業革命、重工業形成が重なった時期でもあり、時代の追い風に乘って叔父彌之助によって築かれた事業の近代化と新たな事業を興して三菱の多角経営化に努めました。

三菱社をより強い会社とした後の大正5年(1916)、久彌は従兄弟である岩崎小彌太に社長の座を譲り、農牧事業へと邁進して行くことになります。

VOL. 1

岩崎久彌の歴史と

久彌による農業経営の成果

今号では、岩崎久彌と別邸があった末廣農場の歴史について紹介します。岩崎久彌という人物、そして久彌の農業経営は一体どのようなものだったのか、岩崎久彌と末廣農場の今後を考えていくためにも、是非知識を深めていきたいと思います。

末廣農場の誕生

牧から森、そして農場へ
牧の開墾と日本初の牧羊場

明治3年(1870)、かつて徳川幕府の直轄牧であった富里の地は、明治政府によって開墾地として利用されることとなります。これは幕府の終焉によって職を失った武士や商人など、「窮民」と呼ばれる人々を救済する目的として行われたものでした。

しかし、元々、農業経験のない人々によって開墾が行われたことや、自然災害が頻発したことから計画は思うように進まず、国の補助金制度も廃止となり、多くの開墾民が富里を去ることになります。

明治8年(1870)大久保利通の主導の下、「下総牧羊場(後の下総御料牧場)」が開墾されたことから、開墾地は政府に買い戻され、「獅子穴区」と称されますが、経営の合理化から再び払下げの対象地となり、同15年(1882)には藤崎友十郎(富里初代村長)が購入を試みます。



▲藤崎友十郎

しかし、代金の納入に苦慮したことから同20年(1887)には払下げの願いを取下げ、その後すぐさま、河村信吾が同地の購入を進めますが、同じく代金の納入に苦慮をしたことから、岩崎彌之助に依頼してこれを買替えてもらうこととなり、これによって343町歩という広大な土地は、牧畜を目的として岩崎家の所有となりました。

森から農場へ

彌之助は、当初からこの土地で農牧事業を行うことを考えており、その方法については久彌に一任していました。しかし、土地が痩せていて地力が弱く、すぐには事業が興せないとわかったことから、松・杉・檜111万本の植林事業を行い、ここに三菱社の「下総植林事業所」を設けました。当初は地名を用いて「獅子穴牧場」と称し、また、地元の人々は扇形に開く独自の地形にちなんで「末廣の野原」などとも呼んでいました。

末廣農場誕生

その後20年間、植林事業として存在した「末廣の野原」は、明治44年(1911)に久彌の実弟である正彌が米国モルガン大学の留学から帰国したことを機に、養鶏と養豚を主要事業とした農場に生まれ変わることで、大正元年(1912)11月1日、ついに先進的施設を備えた「末廣農場」が誕生したのです。



▲末廣農場誕生を祝い、行われた第1回記念祭

次ページでは、末廣農場で久彌が行った農場経営について紹介します。

末廣農場の隆盛

久彌の夢、

模範的実験農場

久彌の実弟である正彌による末廣農場の経営では、洋式の養鶏法が導入され、箸でちぎれるくらいの柔らかで上質な肉が生産されていました。

これらの肉は、宮内省、大使館、帝国ホテル、料亭末廣のみに卸され、一般市場には出回りませんでした。料亭末廣では、鳥肉の刺身を出し、食通に好評を博していました。しかし、生産コストが高かったことから営利事業としては失敗に終わります。

大正4年（1915）、正彌が東京の工場会社に異動となったのを機に、末廣農場の活動は休止状態となりますが、かねてから農牧事業を行うことが夢であった久彌が農場を検分し、同8年（1919）から久彌自身が農場経営に携わっていくこととなります。

■農場名の由来

地元の人々は扇形に開く独特の地形にちなんで「末廣野」または「末廣の野原」と呼んでいました。この呼び名を採用して「末廣農場」と名付けられたのです。



久彌による農業経営

大正8年（1919）から農場経営に携わった久彌の農場経営スタイルは、久彌個人が出資して興した東山農事株に事業を委託し、自らは経営と技術面について月に2、3度東京の本邸から通い、指導をとるというものでした。自己利益的な農場と畜産を実施するのみではなく、畜産と農業の改良に関する多くの資料を作り、逐次各方面の研究会などで発表し、提供していました。

また、農場長であった橘常喜に対して「我が国畜産界の改良進歩に資し得る模範的実験農場を作つて貰いたい」という言葉を残しているように、人の為に役立つ農場を作り上げることこそが久彌の夢だったのです。

この言葉のとおり、末廣農場では養鶏・養豚は言うに及ばず、最新の設備と機械を導入した先進的農法が実践され、と共に多くの研究が実践され、日本の農業牧畜研究に多くの功績を残したと伝えられています。また、ハム、ソーセージ、ベーコンなど、加工食品の自家生産も行われていたことから、ここに農場経営の一つの理想形が完成していたと言えるでしょう。

これらの実績を認めた千葉県農業試験場では、末廣農場に対して白菜や西瓜の原々種栽培を委託しており、ここからも末廣農場の「技術力」と「信頼性」の高さをうかがい知ることができます。

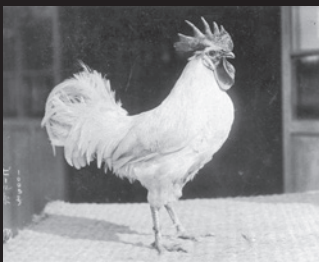
そして大正15年（1926）、久彌は農場内の別荘として「末廣別邸」を建築するのです。

末廣農場の成果 其の一

特に養鶏には力が注がれ、最高時8,000羽を飼育。産卵年間415万個、年間300個以上の卵を産む鶏が50羽以上いるという好成績。



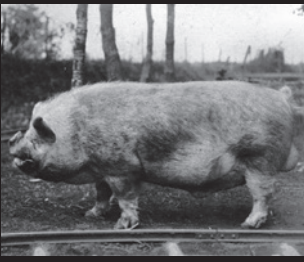
▲鶏の放飼いと孵卵舎



▲管理用番号の付いた鶏



▲豚の放飼



▲種豚（中ヨークシャー種）

末廣農場の成果 其の二

農作物は試験農場を設置し、主に大豆、小麦などを生産。特に下総地方では収穫が難しかった大豆の多収種方法を確認。これらの実績が千葉県に認められ、白菜、西瓜の原種及び原々種の採取を委託される。



▲原々種西瓜の栽培

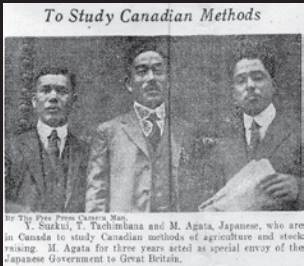


▲トマトの栽培

アメリカ、ヨーロッパの最新機械を導入し、組織的運営を実施。大正12（1923）年には小岩井農場の鈴木・縣両技師と共に橘常喜に8か月に及ぶ海外視察を命じ、先進的な農場経営を学ばせる。



▲Farmall Regular F-20 型トラクター



▲大正12年の海外視察

末廣農場の終焉

戦渦に碎けた

久彌の夢

三菱社長の任にある間、久彌は自己の趣味には幾分遠慮がちであったと伝えられ、社長の任を離れると一気に農牧事業へと傾倒していきます。久彌は政治というものに全くといって良いほど関心がなく、また、大企業を率いたことがあるとはいえ、他と争うということを好みませんでした。自然に接し、台地を愛しむという姿勢が久彌の性格そのものであったと言われています。

晩年、農場の見回りを行う際には、ステッキの先に小さな鎌を取り付けたものを携え、畑の中の雑草を見かけるとそれで刈り取っていたと言われており、その風姿は一介の農夫となら変わるところはありませんでした。しかし、道端に古いわらじなどが捨ててあるのを見かけると「物にはそれぞれ使命があるものだから、最後までその使命をまっとうさせるようにしなければならぬ。古いわらじは堆肥にすれば、また十分役立てることができる」と農場従業員に告げたというような逸話も残されています。

そんな手塩にかけた末廣農場の運命は、昭和20年（1952）の第二次世界大戦の終結から、昭和27年にかけてGHQによって実施された、財閥解体と農地改革によって大きく変わることとなります。

GHQの占領政策によって東京の本邸を物納することになった久彌は、昭和24年（1949）6月21日、末廣農場内に建てられた「末廣別邸（現七栄652番地24）」へと越してきます。

幻の末廣農場

久彌の想い遙かに

広大な農場の敷地のうち119ヘクタールは当時の富里村に譲渡され、198ヘクタールについては、農場従業員の帰農者に払下げが行われました。養鶏と養豚の施設部分約40ヘクタールについては千葉県に譲渡され、千葉県畜産試験場として新たな一歩を踏み出すこととなりました。しかし、昭和30年代後半に至って計画された成田空港建設のためとして、千葉県は空港用地買い上げ農家の代替地として試験場を提供することとなり、末廣農場関係の施設は別邸とその周辺の土地のみとなりました。

こうして久彌が愛情を注いだ末廣農場は歴史の表舞台から姿を消し、その業績は跡形もなく消え去ったのです。久彌は本邸を物納し、昭和24年（1949）6月21日に別邸へと移り住むこととなります。



幻の末廣農場

久彌の想い遙かに

久彌の最期

GHQの占領政策によって東京の本邸を物納することになった久彌は、昭和24年（1949）6月21日、末廣農場内に建てられた「末廣別邸（現七栄652番地24）」へと越してきます。

しかし、同年9月24日、大好きな鶏に囲まれながら起居する静かな余生を送ろうとする久彌にアダムスストークス症候群（心臓病の一種）という病魔が襲いかかり、長い闘病生活を余儀なくされました。亡くなる前年の昭和29年（1954）には「もう2年、生かしておいてくれぬか。今、計画している事があるの、それをぜひやってみたい」と主治医に伝えたというように、闘病の身でありながらも農牧に関する研究への情熱を失うことはなかったのです。

昭和30年（1955）、久彌は90歳という高齢を迎えました。決しておごることなく、すべてのものに感謝しながら「カントリー・ジェントルマン」として農牧の改良に捧げた人生でしたが、高血圧と老衰の進行は医師も絶望視するほどとなり、同年12月1日には更に病状が悪化し、近親者一同が枕元に集います。

そんな中、庭先の木の葉の落ちる音さえ聞き取れそうな静寂の息詰まる数時間が過ぎた夜半の1時15分、ついに久彌激動の人生に幕が下ろされました。

「苦痛はなく、眠るような大往生であった」と岩崎久彌傳は伝えていきます。



▲最晩年、末廣別邸で近親者に囲まれる久彌（岩崎久彌傳より）

次回11月1日号では、久彌亡き後の末廣別邸がどのような状況になったのか、別邸の価値は何か、そして別邸が寄附されるまでの経緯について紹介します。